特別篇：日本のフィルム・アーカイヴ❹

沖縄県公文書館（映像部門）

仲地 洋
Hiroshi Nakachi

連載：
フィルム・アーカイヴ
の諸問題
第24回

本連載特別篇は、国内各地の美術館・博物館・図書館・資料館等、さまざまな公的機関の中で映画や関係資料の収集・保存・情報化・公開等の活動を行なうフィルム・アーカイヴを順次紹介し、その沿革や現状を探るものである。

第4回となる今回は、沖縄県公文書館の映像部門を取り上げる。（HO）

沿革

昭和47年5月15日、沖縄県の祖国復帰に際して膨大な量の琉球政府文書が新生沖縄県に引き継がれた。そして県内の有識者の間に公文書館の必要性が叫ばれ、我が国の公文書館法の公布（昭和62年12月10日）と施行（昭和63年6月1日）の後、しだいに建設の気運が高まった。平成4年3月30日には「沖縄県公文書館基本構想」の報告を受け、建設位置を南風原町字新川148番地3に決定、設計競技を経て工事が平成6年1月17日に着手され平成7年3月29日に竣工した。同31日、「沖縄県公文書館の設置及び管理に関する条例」が公布され、沖縄県公文書館は歴史資料として重要な公文書その他の記録を収集、整理、保存するとともに、これらの利用を図り、もって学術及び文化の振興に寄与することを目的（条例第1条）に同年4月1日に全国で26番目の公文書館として発足し、8月1日に開館した。

館の設置を可能にしたのは幾多の至難を乗り越えた沖縄県の歴史と対座し「深く掘れ己の胸中の泉、餘所たゆて水や汲まぬごとに（己の歴史を知らんとする者は、まずは己の胸の中の泉を深く掘れ）」と詠んだ伊波普猷の琉歌を施設正面に掲げ、県民の向学心の高揚を積極的に求める沖縄県の強い考えであった。

公文書館の業務

館の業務は、(1)公文書等の収集、整理及び保存に関すること、(2)公文書等の閲覧、展示その他の利用に関すること、(3)公文書等の調査及び研究に関すること、(4)その他公文書等の普及啓発、公文書館の設置目的を達成するために必要な業務に関すること（条例第3条）である。

映像・音声資料等は条例で規定している「その他の記録」として公文書等の中に組み入れ、公文書館の取り扱う業務の対象としている。

施設の概要

亜熱帯地方の高温多湿で塩害にさらされている沖縄は、資料の保存にとって厳しい環境であり、公文書館の立地は海岸から比較的離れ、水はけのよい高台であることを考慮して選定された。施設の外観は沖縄の各地に戦前まで多く見られた高倉の集落を装い、屋根は伝統的民家の赤瓦を使用した寄せ棟造の大きな屋根で、雨水を早く流すように民家の屋根より勾配がやや急（30度）であるのが特徴である。構造は鉄筋コンクリート造、地下1階、地上4階、敷地面積11,935.00m²、建築面積3,553.86m²、延床面積7,757.49m²、公文書館の建物は管理棟と閲覧展示棟からなり、閲覧展示棟の1階には講堂と展示室、2階に閲覧室と研修室等が配置されている。講堂では年数回映写会、講座、講演会が開催され、また、当館が収集した映像資料は閲覧室のミニシアター、ビデオブースで開館中自由に視聴することができる。管理棟1階には事務室、整理室、フィルム整理室、製本補修室、マイクロ撮影室、電算室があり、2階、3階、4階、地下1階は書庫となっている。2階の7号書庫（111.82m²、書架総延長3,670,409m）は映画フィルム約2,500巻、VHSビデオテープ約10,000巻、35mmマイクロフィルム60,000ケースが収容可能である。室内の温度は摂氏17度、湿度32%に設定されている。この7号書庫と古文書等を収容する3号の特別保存書庫は二酸化炭素消化設備が設けられており、火災時には二酸化炭素ガスが放出される。

駐車場やピロティー付近には彫刻や焼き物のオブジェ、エントランスホール周辺の壁面には「琉球藩王の印」、「沖縄県知事の印」、「沖縄民政府の印」、「沖縄群島政府の印」、「琉球政府の印」のレリーフ、管理棟の入り口正面には江戸時代の初期に作成された琉球と奄美一円を描いた正保国絵図の複製が設置され館の雰囲気づくりに一役買っている。沖縄県公文書館は設計で建設大臣賞受賞、建造物で建築業協会賞受賞、公共建築百選に選定されるなど内外から注目を受けている。

映像関係機器としては、フィルム整理室に35mm簡易テレシネ、16mm簡易テレシネ、8mm簡易テレシネ、16mm清浄兼検査機、16mmフィルム編集機、講堂の映写室に35mm、16mm兼用映写機、スライドプロジェクター、音響操作卓、ビデオ・カセット・ＣＤデッキ、液晶プロジェクター、研修室にビデオデッキ、スライドプロジェクターがそれぞれ設置されている。

組織の概要

沖縄県公文書館の組織は沖縄県公文書館と沖縄県文化振興会公文書館管理部の二組織から成り、前者は県直営の施設の管理と県予算（施設管理の委託費等）の執行を担当し、後者では総務課、資料第一課、資料第二課が、沖縄県文化振興会に委託された業務（資料の収集、整理、保存、閲覧等）に従事している（県史編纂業務も教育委員会から沖縄県文化振興会に委託され沖縄県文化振興会公文書館管理部県史編纂室として公文書館の中に配置されている）。職員は館長以下30人で、この内、主任専門員2人、専門員7人、修復師1人と、ほかに嘱託員等22人が資料の収集、整理、保存、閲覧等の業務に従事している。

また、公文書館の運営管理等に関する意見等を述べて貰うため沖縄県公文書館懇話会（委員13人、内映像分野が県内のテレビ放送局関係者2人、音声分野がラジオ放送局関係者1人）が年数回開かれている。

資料の概要

公文書館が収集し現在所蔵している史料等は、(1)琉球政府文書165,908簿冊、(2)沖縄県政文書22,760箱（箱は資料が未整理であり、1箱に資料が約10冊前後入っている）と8,636簿冊、(3)アメリカ民政府等文書：USCAR16,438簿冊、(4)行政刊行物22,001簿冊、(5)地域資料20,562簿冊、(6)映像・音声資料4,114巻に分類される。

公文書館に収集された資料は地下1階の燻蒸室で臭化メチルと酸化エチレンの化合剤を用いて減圧燻蒸され、第1号書庫（中間書庫）に仮収蔵し分類、整理、コンピューターへの情報入力が完了したら各専用書庫に配架し、配架済みの資料は全てパソコンで検索ができる。

映像・音声資料の収集

当館では、沖縄地域に限定した関係映像資料の収集に努めている。収集は、製作者が県のものは各課から移管し、映画社や放送局が製作したものは購入し、個人が撮影したものは寄贈をお願いしている。

これまでに公文書館に収集されたものを製作時期、製作者別、提供者別等に簡単に区分してみる。(1)戦前に製作された沖縄関係記録映画5件、(2)沖縄戦時記録3件、(3)戦後に製作された沖縄関係記録映画11件、(4)戦後に米国民政府等が製作した映画3件、(5)戦後に海外で製作された沖縄関係記録

映画4件、(6)マニアがつづる戦後の沖縄6件、(7)沖縄県が主催した行事の記録映画8件、(8)沖縄県が実施した土木、建設工事の記録映画29件、(9)沖縄芸能記録映画8件、(10)沖縄観光映画19件、(11)沖縄の海、海洋博の記録映画約471件、(12)沖縄農業、病害虫根絶記録映画22件、(13)沖縄の伝統工芸9件、(14)県下市町村製作ビデオ7件、(15)ニュース、報道番組55件、(16)公文書館製作ビデオ11件、(17)公文書館講座、講演会等45件、(18)沖縄県国際交流財団寄託移民海外協力隊関係映画118件、(19)沖縄開発庁沖縄総合事務局寄贈生産業関係映画54件、(20)海邦国体関係記録映画24件、(21)沖縄県総合保険協会移管映画10件、(22)沖縄民俗の記録1件、(23)経済関係記録2件、(24)生活情報1件、(25)比嘉太郎移民研究関係映像資料80件、(26)沖縄県広報番組映像資料284件、その他15件で、全体で1,305件の映像資料が収蔵された。

また音声資料については、海邦国体関係資料218件、比嘉太郎移民関係資料157件、沖縄県の民話資料2,434件の合計2,809件である。

「映画はな盛り、されど埋もれつつある映画あり」

昨年は県内各地で「カメジロー」、「豚の報い」、「夢幻琉球・つるヘンリー」、「教えられなかった戦争・沖縄編 —阿波根昌鴻・伊江島のたたかい—」、「BEAT」、「カマドの恋人」等の沖縄をテーマにした映画のロケが相次いだ。

戦前、沖縄で撮影された劇映画は昭和6年に製作された「執念の毒蛇」の他7件余であり、戦後は約70件も製作されている。しかし、現在市販されている映画目録等(「ぴあ・シネマクラブ邦画編」)では1953年の今井正監督の「ひめゆりの塔」を始めに22件余の沖縄関係劇映画のタイトルしか確認できなく大半のものが埋もれて忘れられつつある。これらを発掘して永久に保存して活用することが課題である。これらは復帰前の沖縄の世相を反映した映画や復帰後、沖縄の島嶼性や歴史にはぐくまれた地域性豊かな沖縄の個性を描いた映画を含む。

また、記録映画には、昭和4年の大阪樟蔭女子専門学校の修学旅行の際、引率の朝輝記多留氏が撮影した首里の首里城正殿や尚候爵家及び男子師範学校、那覇の軌道馬車と那覇港等、西表島の石炭の積み出し風景、石垣の市場、宮古島の風景を記録した「体育行脚・沖縄の巻・八重山群島の巻」、昭和13年に日本民藝協会(柳宗悦)が製作した「琉球の風物」「琉球の民藝」、南方文化の探究の河村只雄が沖縄本島及び北部離島を撮影した8mmフィルム、船腰義珍の空手演技等を記録した映画フィルムもある。沖縄戦では、米軍は詳細に戦況や制圧した地域の状況を写真や映画で記録に残した。戦後になって、沖縄を統治した米軍や米国民政府は膨大な数の沖縄に関する記録映画を製作し、統治の情報教育活動に活用した。これらの映画は復帰時に大半が散逸したが、米国ワシントンの国立公文書館には約2,300巻の映画と1,000時間の沖縄戦時記録の映画フィルムが収蔵されている。

戦後に製作された映画で特筆すべきものでは、昭和34年の早稲田大学八重山調査団に同行した日経映画社が製作した「沖縄」、昭和39年九州大学学術調査団に同行した福岡RKB毎日放送が製作した「弧の果ての島・八重山群島」、ハワイ移民沖縄県人で移民研究家の故比嘉太郎氏が製作した「ハワイに生きる」前・後編、そして昭和43年復帰運動も最高潮の頃に製作され、沖縄の置かれていた状況を強烈に風刺し、沖縄からの行動団の一部の学生が東京晴海埠頭に到着した船上でパスポートを焼くショッキングなシーンが印象的な東陽一監督の「沖縄列島」等がある。

映像資料の活用

収集した沖縄関係記録映画を上映し、映像に映し出されたその時代の理解を深めるとともに、映像資料の収集と保存、活用の重要性の周知を図るため定期的に上映会を開催している。

平成8年は開館1周年事業として2日間のフィルムフォーラムと3日間の上映会を開催した。1日目は「映像は語る その1」。「明日を導く人々」を上映した後、当時、米国へ留学し映画に記録された4人の内の3人に、歴史を証言すると言う視点で米国での体験を語ってもらった。2日目の「映像は語る その2」では、昭和34年石川市に墜落した米軍のジェット機墜落事件を市民が8mmカメラで撮影した記録フィルムを上映後、事件から37年が経過しても地域では語るのは今なお重苦しい雰囲気にあり、事件の検証の重要性を再考し事件に関する話を沢山語って頂き、事件について当時の状況を把握することができた。当日、出演された皆様が語って頂いたことはこの事件を正確に記録する作業の1つであり、このことは戦後の沖縄県の歴史を考える上で最も重要なことである。この企画を進めるにあたり、沖縄県公文書館が墜落したジェット戦闘機と同機種の資料を蒐集したら、同機種は米本国で開発の頃から空中爆発等の大きなトラブルを発生させたり、特に正式に公表されていないが、1959年1月18日に太平洋にある基地で核爆弾を搭載したF100Dジェット戦闘機がエンジンを始動した瞬間爆発と火災が発生、消防車に消火されるという事故が発生したがそれは沖縄の嘉手納飛行場だった可能性が高いと専門の戦闘機雑誌は掲載している。今考えても沖縄が全滅するような大事故に到る身震いするような事故が多数発生した。石川ジェット機墜落事故のみならず、1968年に嘉手納飛行場で発生したB52墜落大爆発事故、あるいは公表されずに我々が知らない事故等も含めて米軍の事故調査資料を米国の公文書館から取り寄せ県民側から見た事故の検証をすることが急務であると考えている。このことが石川ジェット機事故で犠牲になった方々やその他の米軍の事故や事件で死去した方々のご冥福を願う最上の方法であると考え、県民が絶えずその時代々々を検証する作業を進め平和な沖縄を作っていくきっかけになると考えることができると司

「映像は語る その2」会場風景

会はしめた。

その後の3日間の映画祭での上映番組はそれぞれ1日目が「琉球」、「沖縄行脚の巻」、「沖縄列島」、2日目が「RED HAT OPERATION:毒ガス輸送作戦」、3日目が「執念の毒蛇」、「海を越えてこの感激を:ブラジルで祝った沖縄の祖国復帰」である。このうち「琉球」、「沖縄行脚の巻」、「RED HAT OPERATION」の3本は沖縄県立図書館収蔵の映画である。「琉球」はUSCARが製作した昭和30年代の沖縄の各地を記録した16mmフィルムである。

「沖縄行脚の巻」と「沖縄列島」については前述したからここでは省略する。「RED HAT OPERATION」は昭和46年に行われた米軍の毒ガス撤去輸送作戦の記録映画でUSCARが製作した。昭和44年7月18日、24人が病院に収容されるガス漏れ事故が発生し、沖縄の嘉手納弾薬庫に毒ガスが貯蔵されているのが明らかになった。米軍は沖縄側の断固たる反対に対して毒ガスを米国領内のジョンソン島に移送することを決定し、昭和46年1月13日に沿道の住民5,000人を避難させて、第1次移送で150トンを具志川市にある米軍港の天願桟橋から船積みした。第2次移送は同年7月15日から9月9日までの56日間にわたって行われ、沿道の住民は不安な日々を送った。3日目に上映された2本の内の1本目の「執念の毒蛇」(吉野二郎監督)は昭和6年に製作された無声映画で、男に裏切られた女が蛇と化し復讐する劇映画である。2本目は昭和47年の沖縄県の祖国復帰に沖縄と東京で式典が行われた同じ日時に、遠く離れたブラジルの地で沖縄県人会の人々が中心になり沖縄の祖国復帰を心から喜んだ祝賀会の記録映画である。沖縄県人会役員の喜びの挨拶、他府県県人会の祝福の挨拶、ブラジル国要人の沖縄県人へ賞賛の挨拶、沖縄舞踊、空手演技、他府県県人会の出身地の芸能、最後は首里城明け渡しの沖縄芝居で幕となる。この映画フィルムは、沖縄県国際交流財団から寄託された海外移民・海外協力隊関係映画フィルム118本の中の1本である。

平成9年は沖縄県祖国復帰25周年にあたり、県内で記念の行事が目白押しに開催された。当館でもこれを記念して「映像資料で見る復帰前の沖縄」と題して復帰前までに製作された映像資料の上映会を開催した。上映会は復帰記念日の5月15日より10月24日まで、毎月1回(5月以外は第4金曜日)午後6時より午後8時までの2時間、当館の講堂で開催した。入場料は無料であり、毎回70人前後が参加

沖縄県公文書館全景

した。

第1回目は「RKBニュース」4本(「屋良、喜屋武、佐藤、ニクソン共同声明」、「22年ぶりに日の丸沖縄によみがえる」、「沖縄の貨物船に日の丸贈呈」、「芥川賞に大城氏」)、「復帰への選択」、「海を越えてこの感激を」を上映した。「RKBニュース」と「復帰への選択」は福岡RKB毎日放送の協力で16mmフィルムをベーカムのテープに変換して収集した。共同声明とは沖縄の祖国復帰について日米間の協定でとり決めた事項を佐藤総理大臣とニクソン米国大統領が共同で発表した声明のことだが、完全復帰を願った県民の期待に反し米軍基地が現状のままの本土並返還のこの声明に対応して行われた屋良朝苗琉球政府主席と沖縄県祖国復帰協議会喜屋武眞栄会長による沖縄側の声明は、むなしさが漂うものとなった。あの日の丸がなびく祖国に帰りたいと沖縄の祖国復帰運動の象徴的存在であった日の丸、米国の統治下で日の丸の掲揚を認めなかった米国。第57回上半期の芥川賞に沖縄の大城立裕氏の「カクテルパーティー」が受賞し、これまで文学不毛の地と云われた沖縄であったがその後も2名の受賞者を誕生させた。

6月に予定していた映写会が台風が接近したので取りやめ、7月25日に2回目の上映会で「琉球の風物・琉球の民藝と沖縄列島」が上映された。3回目の8月22日には「切手のふるさと 沖縄切手たどりがき」、「孤の果ての島・八重山群島」、「船越義珍の空手演技」、9月26日には「ハワイに生きる」(前編)、「切手のふるさと 沖縄風土記」、「奄美大島」、10月24日には「報道特番 基地沖縄の素顔」、「船出」、「ハワイに生きる」(後編)を予定通り上映して会期を終えた。

11月7日は、当初は予定されていなかったが、資料収集の気運を高めるため「上映とトーク」を企画し、沖縄の復帰前後に日本テレビのカメラマン兼ディレクターとして活躍された森口豁氏を講師に、「ノンフィクション劇場 乾いた沖縄」、「ドキュメント 71 かたき土を破りて」を上映した後、記録映画を製作した頃の沖縄について語って貰った。森口氏は昭和38年から平成元年までの27年間に、沖縄の島々の記録を「ノンフィクション劇場」、「ドキュメント」等で28本製作した。「乾いた沖縄」は、昭和38年、百年に一度という大干魃が沖縄を襲ったときの久高島の人々の生活の一端を記録したものである。「かたき土を破りて」は、昭和45年のコザ騒動の記録であるが、事件のコメントを求められた琉球大学教授大田昌秀氏(前沖縄県知事)の「沖縄住民の意思願望が反映されないような政治、行政というものはもう必要ないんだという時点まで来ている。議会、政府、裁判所が民主主義の政治を実現していく過程で正常な、期待されているような機能というものを果たさないとコザのような事件はますます広がっていく、あるいはもっと激しい形の事件が起こる可能性すらあるんです」と語る言葉が印象的であった。

平成10年度は「映像資料で見る沖縄現代史」のタイトルで映写会を開催した。映像資料に写し取られた戦前戦後の沖縄について、それぞれの研究者に解説してもらい当時の世相や人々の動向から沖縄現代史を探究した。上映した映像と解説を以下に示すと、8月は宮城悦二郎(沖縄県公文書館館長)の解説で「朝日映画ニュース」(「時の話題・那覇市長に瀬長氏就任」、他18ニュース)、9月は小島瓔禮(琉球大学教授)の解説で、河村只雄撮影南方分化の探究関係8mm映画、10月は嵩元政秀(沖縄考古学会会長)の解説で、「沖縄」(早稲田大学沖縄八重山調査団に同行した日経映画社が製作した昭和34年の八重山、沖縄の記録映画)である。

映写会ではアンケート調査を行い参加者から意見を伺っている。上映内容については毎回とも多くの見学者から大変良かったと好評を頂いている。そのことは多くの県民が沖縄関係映画に高い関心を持っている結果と考えられる。時には古い映像をもっと鮮明にして提供してほしいと、古い映像資料の弱点を突かれることもある。そして、ほとんどの人々が沖縄戦で失われる前のありし日の沖縄の姿を見たいと要望される。また、絶えず要望があるのは沖縄戦時記録映画や戦後、復帰前までの沖縄関係映像資料である。戦後、本土のマスコミ各社は精力的に沖縄を報道した。その膨大な映像資料は各社で所蔵されており、沖縄県にとっては貴重な映像資料である。近い将来、米国国立公文書館所蔵沖縄関係映像資料をはじめ全ての沖縄関係映像資料が沖縄県公文書館で自由に検索ができ効果的に映像文化活動が展開できることを願う。

(沖縄県公文書館公文書主任専門員)

fiaf

東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ
http://www.momat.go.jp/

お問い合わせハローダイヤル
☎03-3272-8600

「NFCニューズレター」第24号
(1999年3-4月号/隔月刊)

発行・著作:
東京国立近代美術館©
〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3
☎03(3214)2561
編集:
東京国立近代美術館フィルムセンター
〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6
☎03(3561)0823
制作:
印象社
発行日:
1999年3月1日

*無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER
Bimonthly
(Volume V No.2 March-April 1999)

Published and Copyrighted by
The National Museum of Modern Art, Tokyo ©
Edited by
National Film Center
(The National Museum of Modern Art, Tokyo)
Add.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan
Tel.: 03(3561)0823
Designed and Produced by
Insho-sha
Date of Publication:
March 1, 1999

*No part of this publication may be reproduced or reprinted without the approval of the publisher.